

「救急医療の今」

巻 頭 言

京都市立医科大学大学院医学研究科
消化器外科学 鏡視外科光学講座

落 合 登志哉

医学・医療は最近の20数年を考えても目覚ましい進歩を示した分野とそれほど変わっていない分野があると思われませんが救急の分野はまさに隔世の感があるといっても過言ではありません。筆者が医師になった1980年代、気管内挿管を含むALS (Advanced Life Support) はおろかBLS (Basic Life Support) さえ満足に教育されず、簡単なオリエンテーションだけで外科に入局して3カ月目には市内の一線病院に当直に行かされていました。“救急マニュアル”と当直病院に据え付けられ仲間うちで自主的に書き継がれた“経験談ノート”を心のよりどころにしつつ、不安を抱えながら救急車の到着を待って(恐れて?)いたのです。何の予備情報もないままに救急車が到着すると救急室に呼ばれるのでいわゆる“たらいまわし”はありようがなかったのですがそんな病院にも心肺停止や重症症例は容赦なく来ましたのでそれはそれで大きな問題を孕んでいたと思います。

今回、「救急医療の今」と題して特集を企画しました。本学に救急医療学教室が誕生して2年が経過しましたがここで本学を取り巻く救急医療について一度総括が必要と考えました。執筆者には現在、救急医療で活躍されている5人の先生をお願いいたしました。救急医療学教室の太田 凡教授には医の原点たる救急医療の現況・未来について総論的に概説していただきました。同じく山畑佳篤講師には救急医療・教育について京都・本学の現状について紹介していただきました。また、京都第一赤十字病院救急

部の高階謙一郎先生には病院に到着するまでの医療、いわゆる病院前救急についてドクターヘリ、ドクターカーの活用や災害医療の観点から解説していただきました。第二岡本総合病院外科救急部の清水義博先生にはAcute Care Surgeryについて外科学における位置づけからその教育について病院の実践から述べていただきました。最後に京都市立与謝の海病院救急科の隅田靖之先生には高齢化が進む京都北部の救急について論じていただきました。

いずれの原稿も実際に救急の現場に深く携わる立場からの深い洞察に満ちた論考であり、改めて救急医療について考えさせられるとともにその目覚ましい進歩に感銘を受けました。しかし一方で本学における救急医療を振り返ってみるとはまだまだ不十分な面もあり、これだけ進歩した救急の理論にあって、現実を追いついていない感も否めません。若い先生方・医学生の多くはいずれも救急医療に関心があり、救急医療が盛んな病院が研修先で人気が高いとも言われております。

先日金沢で開催された第48回腹部救急医学会は空前の参加者が集い、各セッションにて盛んな議論がなされ、この分野の関心は高いことを改めて実感しました。総合性と専門性がうまく融合して救急医療が本学でも十分に機能して欲しいと思うのは筆者だけではないと思います。本特集が今後の救急医療を考える上での一助となることを期待しております。